

(一社)日中文化事業団会報

(旅行特集1号)



旅行特集1号 2025年11月03日(月)
(一社)日中文化振興事業団 主催
編集者 胡金定(甲南大学名誉教授)
電話 090-3350-8368
E-mail kokintei-1@mpd.biglobe.ne.jp

(一社)日中文化振興事業団による『胡先生と行く 雲南省・四川省の旅』企画

2024年10月11日～18日、一般社団法人日中文化振興事業団が主催する「胡先生と行く 雲南省・四川省の旅」7泊8日間で中国雲南省麗江市、四川省成都市、樂山市へ友好交流をしてきました。

今回の旅行を記念に参加者全員に旅行記や感想文を書いて頂き、「(一社)日中文化振興事業団会報」(旅行特集号)に掲載しました。参加者の氏名(順不同、敬称略)を下記の通り

若月章、井上一・さち子、秦爽、余保充徳、竹田昇・清美、高木優次、増田和俊、岡田達也・直子、古瀬裕功、久野正博、中島章雄、鴻原明子、金馬悦子、吉田豊昌・まゆみ、陸洋、胡金定 (参加者20名)



今日の日中関係「耳聴為虚、眼見為実」

一般社団法人日中文化振興事業団代表理事 胡金定

中国には「耳聴為虚、眼見為実(耳で聴くは虚なり、眼で見るは実なり)」という諺があります。耳で聞いたことは嘘(偽り)であり、目で見たことこそが真実である、という意味です。物事の真偽は、人から伝え聞いた話ではなく、自分の目で直接確認して判断すべきであるという教訓を示しています。

また、漢・劉向『説宛(ゼイエン)』政理篇で、「夫耳聞之不如目見之、目見之不如足踐之、足踐之不如手辨之(夫(そ)れ耳に之(これ)を聞くは、目に之を見るに如(し)かず、目に之を見るは 足に之を踐(ふ)むに如かず、足に之を踐むは 手に之を辨(ベン)ずるに如かず)」。現代語で言いますと「耳で聞いたことは、目で見ることに及ばない。目で見たことは、足で踏むのに及ばない。足で踏むのは、手で扱うのに及ばない。」という意味です。

「中国に行かなければ、中国の真実が分からない」という言葉のように日本国内の報道だけで本当の中国の姿が分かりません。

日本のマスコミによる中国報道は、しばしば中国の脅威やネガティブな側面を強調する傾向があり、中国社会の多様性や日常的な側面が見過ごされがちです。

日本の主要メディアは、中国の台頭を否定的、対立的に解釈する傾向があり、日本政府の中国脅威論の対中政策が、メディア報道に影響を与え、さらにその報道が世論を悪化させるという悪循環が生じています。商業メディアは視聴率や販売部数を重視するため、人々の関心を引くネガティブなニュースや事件、ステレオタイプに合致する情報を優先的に報道し、中国経済の減速や不動産不況など、特定の課題に焦点を当てた報道が多い。ニュースは読者や視聴者に興味を持たせるための「ストーリー」として構成されることが多く、複雑な現実が単純化されたり、中国崩壊論に当てはめられたりすること、マスコミに登場する専門家が、マスコミや視聴者のステレオタイプに迎合するような意見を述べる傾向がある場合、報道の偏りがさらに強まる可能性があることなど、これらの要因が複合的に絡み合い、日本のマスコミ報道と中国の現実との間にギャップを生じさせています。

中国は社会、経済、技術などの面で非常に速いスピードで変化し、数年前に得た情報が、今ではもう古くなっていることも珍しくありません。中国を訪れ、現地の人々と交流することを通して、中国の「今」を肌で感じることができます。

「中国に行かなければ、中国の真実が分からない」という言葉は、固定観念に囚われず、自らの目で見て、感じて、判断することの重要性を説いていると言えるでしょう。

日中両国間の未来志向の関係を築くためにも、対話と交流を続ける努力が求められます。当事業団は日中両国の友好交流を促進して、恒久的な友好関係を保つ目標を掲げて設立しました。これからも引き続き、幅広く人的な交流や日中友好交流事業を行って参ります。

はじめての中国

高木 優次

1日目の夜に訪れた麗江の街並みは日本と全く違う雰囲気でした。ネオンや提灯で明るく照らされており、夜でも多くの人でにぎやかだったことに驚きました。壁一面の提灯は『千と千尋の神隠し』のようでとてもきれいでした。しかし、バイクや車は電気自動車が多く、街並みはにぎやかなのに音は静かでさらにびっくりしました。

パンダ谷では、今まで日本でほとんど見ることはなかったパンダを間近でたくさん見る事ができました。広々としたところでのびのびと過ごしている姿や、木や岩に挟まっている姿がとても愛らしかったです。白と黒というイメージが強いパンダですが実際は少し茶色く、野性味があって印象的でした。関西ではもうパンダを見ることはできないのでこんなにも多くのパンダを目に焼き付けることができて貴重な体験になりました。そして、樂山大仏の大きさに圧倒されました。樂山大仏



までは千以上の階段で道のりは長く思っていたよりも足腰に負担がかかり体力を使いました。しかし、頑張って千以上の階段を上ったからこそ樂山大仏を見たときの感動はとても大きかったです。船から見た樂山大仏も迫力はありませんでしたが足元から見た樂山大仏はもっと迫力がありました。大きい大仏ですが、唇の色が違ったり、手に爪があったりと細かいところまで丁寧に彫られておりさすが世界遺産だと圧倒されました。

本場の四川料理をみんなで円卓を囲み食べたことも思い出に残っています。四川料理は日本よりも量が多くて驚きましたが、少しピリッとしておいしかったです。その中でも麻婆豆腐と青椒肉絲が今まで日本で食べてきたものとは違い香辛料が効いていて感動しました。

はじめての中国で不安もありましたが、最後まで楽しく過ごすことができて良かったです。観光地を歩き回ったり、言葉が分からなかったりしんどいこともありましたが、今まで見たことのない景色や文化を感じることができとても良い経験になりました。



旅に参加して思うこと

鴻原 明子

今回、麗江・成都を巡るツアーに参加することができ、どの瞬間も心に深く残る思い出となりました。玉龍雪山では、標高4000メートルを超える山に挑戦し、息苦しさや足の重さに何度も立ち止まりましたが、諦めないこと、そして根性の精神を最後まで貫く故金定教授とともに無事山頂まで到達することができました。登頂した瞬間は、これまでに経験したことのない大きな達成感と、限界を乗り越えた自分に少し感動しました。この経験は、今後の人生でも自信や勇気となり、大きな支えになると思います。

東巴書院では、初めて東巴文字を書くという体験ができたことが強く印象に残っています。ただ眺めるのではなく、自ら筆を取り文化の重みを実感したことで、麗江ならではの歴史や伝統への理解が格段に深まりました。また、蒋会長が準備してくださった心温まるおもてなしにも感謝の気持ちでいっぱいです。歓迎会での歌や踊りを通じて、現地の方々との交流が生まれ、旅がさらに楽しいものになりました。

樂山市では、政府の方々の特別な配慮で優遇していただき、おかげさまでスムーズに見学を進めることができ、大変感謝しております。樂山大仏は圧巻で手を合わせる事ができて良かったです。

今回のツアーは想像以上にハードなスケジュールでしたが、人生の先輩方とご一緒し、お互いに励まし合い気遣い合いながら、一つ一つの行程を乗り越えることができました。皆様と共に過ごす中で、様々な価値観や人生観に触れ、多くの学びを得ることができたのもこの旅の大きな収穫です。

最後に、素晴らしい体験と多くの学びを与えてくださった胡金定教授、理事の皆様は心より感謝申し上げます。大切な思い出とともに、これからも前向きに日々を過ごしたいと思います。

初めての中国旅行

増田 和俊

今回、初めての中国旅行で僕が特に印象に残った所は雲南省の麗江でした。

中国旅行初日と言う事もあり、伝統を引き継いでいたり、またナシ族と言う民族の方達も初めて見ました。ナシ族の伝統的な音楽や、古代トンパ文字などは初めての体験で凄く感動しました。

トンパ文字の授業を受けて自分の名前の文字をこんなふうにかくのだなと思い凄く面白かったです。

初日、2日目と泊まったホテルで自家製造している「雪桃ビール」はお酒の飲めない僕でも美味しく飲むことが出来て本当に感動しました。

2日目の夜の食事でも今まで食べたことのないトリュフのお刺身も頂きとても美味しかったです。

また、初めて富士山よりも高い4506mの玉龍雪山にも登ることが出来ました。残念ながら僕は山頂までは行けなかったですが70歳代の方が元気に山頂までたどり着いていた事にビックリしました。本当に凄いなと思いました。

玉龍雪山から降りてバスに乗った帰りの川は凄く綺麗で僕の人生で初めてあんなに綺麗で大きな川を見ました。陸さんになぜ川があんな色になっているのかを聞いたら玉龍雪山からの石灰が川に流れてあんな色になっていると教わって凄く勉強になりました。

川が水色で本当に綺麗で感動しました。

その他の日も色々世界遺産を回ったり、政府の方々と食事をしたり、自分にとっては凄く良い経験になり今回こうして中国旅行に行けて本当に良かったと思います。

最後に今回の中国旅行を通じて、日中友好にかけの思いが自分の中でさらに強くなりました。僕達若い世代を含めた民間の交流を継続的に発展させていく事が大切だと思い、また対話を重ねて真の友好関係を築いて行きたいと思いました。



悠久の中国を巡って、反省記

中島 章雄



「日中友好なくして、アジアの安定と世界の平和もない」——私の「人生の師匠」の言葉です。胡金定先生・皆様と3度目の中国旅行について私自身の反省と感想を記します。

冒頭の言葉を信条と定めた私は、45年前の毎日新聞新人記者時代、初任地・愛媛県の高校生(吹奏楽部員)に同行し山東省を訪れ、中国の高校生との交流を「日中友好を奏でて」のタイトルで記事に。大阪本社社会部記者時代、編集局長から「台湾の李登輝総統にインタビューしてこい」という無理難題を受け台湾に。総統との面会はありませんでしたが、要人と会見し記事に。東京本社政治部首相官邸キャップ時代、政府専用機で橋本龍太郎首相と香港▽小渕恵三首相と北京にそれぞれ訪れ、日中友好の記事を掲載しました。

そんな私が、今回の旅で「日中友好訪中団」の横断幕を複数人で持って記念撮影しようとした際、中国の方が撮影者と私たちの間に入ったまま動いてもらえず、すかさず「どけ!」と大声をかけてしまったのです。「日中友好」からほど遠いひどい言葉。猛反省するとともに気が重くなりこの原稿の筆も進みませんでした。

「日中友好は『涓滴(けんてき)岩を穿つ』の譬えの如く、心ある先人たちが一滴また一滴と、両国の間に立ちはだかる頑強な岩盤を穿ちながら切り開き」「長い歳月を通じて堅実に積み重ねられてきた友好交流の絆の重みがある」との言葉が胸に突き刺さりました。

旅行中、胡先生から「三星堆遺跡、知ってる?」と問われ、答えに窮しました。帰国後NHKが3度特集し、世界的発見であることを知りました。北京五輪開会式のチャン・イーモウ総監督制作で、天つく玉龍雪山を背景に民族舞踊と素朴な歌の露天演劇「印象麗江」に圧倒され、世界で唯一現存する象形文字「東巴文字」で「世界平和」と書いていただいた東巴書院の和先生に感謝。「パンダ谷」のかわいらしいパンダたち、心からの歓迎宴と懇談していただいたブルームーン渓谷ホテル社長の蔣伶さん、樂山市政府の趙波書記をはじめとする中国の皆さんの心づくしの歓待が心に沁みました。最後に、参加者の皆様、途中で私自身が迷子になりご心配とご迷惑をおかけました。その間、生きた心地がしませんでした。皆さんののおかげで、無事生還できました。ありがとうございました。

麗江東巴文化を見学しての感想

秦 爽

今回の旅行内容が豊富で、得るところが多かったです。特に印象に残った「麗江東巴文化」の見学でした。

麗江の東巴文化の見学は、ナシ族の歴史や信仰、生活についてより深く理解でき、感動を覚えました。以前は麗江古城といえば、美しい景観や古風な建築で知られていると思っていましたが、現地で体験して、独特で奥深い文化体系——東巴文化を知り、驚きました。

蔣社長の東巴文化書院に入ると、まず目に飛び込んできたのは、色鮮やかな壁画や古い経典、そして神秘的なトーテムでした。東巴文化書院の和先生は私たちに、「東巴」とはナシ語で「智者」を意味し、祭司・呪術師であると同時に文化の伝承者でもあり、東巴は宗教儀式だけでなく、教育・医薬・芸術・技術など、さまざまな社会的役割を担ってきたと説明してくださいました。東巴文化の核心は、「人と自然の調和」にあり、現代社会が提唱するエコロジーの理念にも通じるものです。

なかでも私が最も印象深く感じたのは、東巴文字が世界で唯一、現在も使用されている象形文字であることです。ひとつひとつの文字が小さな物語のようで、ナシ族の神話や歴史、日常生活を生き生きと描き出しています。文字を読むことはできませんが、そこから天地万物への愛と畏敬、生命の循環への思索、そして祖先の知恵への敬意が伝わっているようです。

蔣社長は、東巴文化における自然崇拝についてもお話してくださいました。ナシ族の人々は、山には霊が宿り、水には魂があり、一草一木すべてに命があると考えています。一年を通じて多くの祭祀が行われ、儀式の中ではお香を焚き、お経を唱え、手作りの供物を捧げて自然の加護を祈ります。この「万物に霊が宿る」という世界観は、現代社会の中で忘れられがちな、心と自然とのつながりを改めて考えさせられました。

東巴文字の書や絵画、木版画を体験したことは忘れられません。その色彩が鮮やかで、構図の自由奔放、原始の生命力にあふれています。束縛のない芸術表現の中に、素朴で力強い美しさを感じ、東巴文化の創造精神を実感しました。東巴文字は芸術的で贅沢な装飾ではなく、信仰の延長であり、天地と対話するための言葉でもあり、またこの土地と生活への深い愛の表れなのです。

心を打たれたのは、現地の人々の文化継承に対する真摯な姿勢です。現代化の波が押し寄せる中でも、麗江の人々は東巴文化の保護と伝承に力を注いでいます。東巴学校の設立、若者たちが文字を学び、祭祀に参加し、歌い踊り、世代を超えて守り続ける人々の情熱と愛情の中に東巴文化が生き続けていることを感じました。

東巴文化がナシ族の誇りだけでなく、人類文明の貴重な遺産であることを深く実感しました。それは、私たちに自然への尊敬、生命への畏敬、そして文化遺産を大切にすることを教えてくれます。現代社会の発展は、伝統を失うことで成り立つものではありません。伝統の中に革新を見だし、敬意の中に未来を築くことこそが、文化を永遠に輝かせる道なのだと思います。

麗江を後にして、遠くにそびえる玉龍雪山が輝いて、私の心には静かな敬意が湧き上がりました。東巴文化は、まるであの雪山のように、古く、清らかで、この地を静かに見守りながら、人と自然、人と文化の関係をもう一度考えるきっかけを与えてくれたのです。



麗江・成都の旅感想文

小瀬 裕功



今回の中国旅行は、私にとって非常に有意義で忘れがたい体験となりました。旅行を通じて、さまざまな経験を積むことができ、それぞれが私に新しい視点や感動を与えてくれました。

まず、何と言っても一番のメインイベントは「玉龍雪山」への登山でした。標高4,680mという高い山に登る経験は、私にとって初めてのことでした。日本にはこんなにも高い山がないため、最初は少し不安を感じていましたが、日頃水泳をして体力をつけていたこともあり、なんとか大丈夫だろうと考えていました。しかし、山の空気が薄く、登るにつれて息が上がり、想像以上に大変でした。それでも何とか登りきることができ、頂上にたどり着いたときには感動で胸がいっぱいでした。

頂上で記念撮影をしようとしたところ、ちょうどツアーメンバーがいなかったため、1人の中国人の方に頼んでシャッターを押してもらいました。そのおかげで、4,680mという標識と共に記念写真を撮ることができ、今でもその写真を見るたびに当時の感動が蘇ります。今回の旅行では、参加者20人のうち半数が70代という高齢者の方で、私も含め皆が頑張って登ったことがとても印象的でした。

また、拉市海湿地渡り鳥保護区では馬に乗って散策する体験も貴重な思い出となりました。私の好きなテレビ番組「空旅中国」で見た茶葉古道を馬の隊列が行くと同じような体験ができたのは本当に思い出に残ります。

さらに、「東巴文字」の実習を通じて、中国少数民族の文化に触れることができたのも、非常に貴重な経験でした。少数民族の言語や文化に直接触れることができ、その深い歴史や背景について学ぶことができました。これも、一般的なツアーでは得られない体験であり、改めて中国という国の奥深さを実感しました。

この旅行を通じて、現地の人々とのふれあいがあったのもさることながら、旅行社の蒋社長様や通訳ガイドの鄭さん、易さんが丁寧にかつ忍耐強く案内をいただいたことに感謝いたします。

人と会い、人と語り、心をつなごう！

余保 充徳

2回目となる事業団の研修ツアー、今回も感動と発見の連続だった。

麗江は標高が高いので酸素が薄いと聞いていたが、飛行機を降りるなりクラッとしたのは予想外のことで驚いた。すぐに慣れるだろうと思ったが甘くはなく、二日目の玉龍雪山では高地の洗礼を受けることとなった。標高4506メートル、ロープウェイを降りた瞬間ふらついて足がもつれそうになる。ワンダーフォーゲルで日本のアルプスに登っていたが世界は広い。思えば、日本の山はまだ低山だったのだ。そこから緩急の階段を上ると4680メートルの雪渓までたどり着く。酸素スプレーの助けを借りながらようやく辿り着くことが出来た。途中、へたり込む若者を多く見かけたが、皆、登りきることが出来たのだろうか。登頂地点の透き通った青空と眼下の景色は、薄い意識の中にしっかりと刻まれている。実にしんどかったけれど、久方ぶりの達成感を味わえた。

以前から興味があった東巴文字。講習も解りやすく、民俗学的にも言語学的にも改めて学びたくなった。頂いた書籍「東巴的智慧」(中国語)を紐解き翻訳アプリと格闘していると、先生方の顔がよみがえってくる。蒋さんのホスピタリティが行き届いた書院で、もう一度家族で訪れたいと思った。大切な文化遺産が、永遠に守られ発展することを祈っている。

後半は、四川省成都へ。樂山大仏は予定を変更し川から船で拝見、おかげで全体を俯瞰できた。徒歩での見学コースは階段がキツそうだったが、まじかで見ると大仏の迫力も体験したかったところだ。当地に友人も出来たので、もう一度訪問するのも悪くはないと思っている。樂山市では、中国共産党樂山市書記の趙波氏はじめ、中国共産党並びに多く政府関係者の皆様から熱烈に歓迎をうけた。互いに敬意をもって接し、共々の発展を目指した日中友好の推進。なかんずく、民間が関係する交流の大切さを実感する一時であった。胸襟を開き、肩の力を抜いて率直に言葉を交わすことの大切さを改めて学んだ。

遠来とはいえ、見知らぬ客を真心こめてもてなしてくださる真心が何よりも心にしみた。実に楽しいひと時だった。関西万博で来日された中国共産党樂山市委員会宣伝部常務副部長の楊丹氏、大阪のプロモーションでお会いしたかったが叶わず残念に思っていた。今回、地元でお会いする機会を得、とても嬉しく思っている。これからも、より多くの方が興味を持ってくれるよう、樂山市のピーアールに貢献したいと思う。

皆さんと、もっと話したかったが限られた時間で、あつと言う間の一時だった。幸いSNSは強力な味方だ。ウェイチャットでの会話はその後も続いているし、これからも何時だって対話出来る。大切なのは、繋がることだと改めて思っている。



トンパ文字とは、中国の雲南省に住む少数民族・ナシ族に伝わる、世界で唯一「生きた象形文字」とされる文字です。約1400の単字を持ち、祭司や書記官にあたる「トンパ(東巴)」と呼ばれる人々が、宗教的教典の記録や冠婚葬祭、占いなどに用いてきました。絵画的で親しみやすい形が特徴です。